

ヒキガエルとロバ

雨あがりのはだけ道。学校帰りのアドルフとピエールたちの前に、ヒキガエルが一びき飛び出してきた。

「うわっ、なんだ！」

「気持ち悪い！」

「ヒキガエルだぞ！」

「石をぶつけてやれ！」

子どもたちは口々にそっさけびながら、ヒキガエルめがけて、小石を投げつけ始めた。

「あたって、あたって。」

「おい、もっと石を持って来いよ。」

アドルフに言われて、ピエールたちは、道ばたから石を集めてきた。

ヒキガエルは、子どもたちに追われながら、どろんどろん道にある車

のわだちべころがりこんだ。わずかに水がたまって緑色をしたそのくぼみの中で、ほっとした気持ちになったようだ。ゆっくりとからだにつけられたきずをあらいだめた。

ちょうどそのとき、としをとったロバが荷車を引いてやって来た。耳も聞こえず、目もよく見えないようなやせたロバだった。荷車にも、せなかにしゃべっている大きながしにも、野菜がいっぱいつままれていた。荷車に乗った農夫から、たえずピシリピシリとむちで打たれていた。きっと一日のつらい仕事と長い道のりにつかれはて、へとへたになって自分のうまやに帰っていくとちゅうなのだろう。一歩一歩ふみしめるようにどろんどろん道を進んできた。

「アドルフ、ヒキガエルのやつ荷車にひかれるぞ。」

「そっちを見ているほうが面白そうだ。」

アドルフたちは、見守った。

ガタン、ゴトン、ガタン、ゴトン。くぼみにロバが近づいて来るが、坂道にあるわだちのあとがでこぼこでなかなか前に進まない。

農夫は、ぐいぐいとたづなを引っぱり、むちを打ちつづける。

「ハア ハア……。」

ロボの息があらくなる。一歩一歩近づいてきたロボは、そのときふと、自分の足もとできずをおってじっとしているヒキガエルに気がついた。

くぼみの中のヒキガエルは、もう動く力もないようだった。ロボは、目をとじている小さな生き物に鼻を近づけ、友だちを見るようなやさしい目でじっと見つめつけていた。

農夫は、急に前に進まなくなったロボにはらたて、何度もむちを打っている。

「ヒヒーン！」

とつ然ロボはいなくなると、グーンと足をふんばった。自分に残ったすべての力をふりしぼるかのように、歯をくいしばって足に力を入れたのだ。せおったかこが横にふられた。重い野菜がたくさんつんである荷車も少し動いた。ロボの顔は、さらに苦しそうになった。

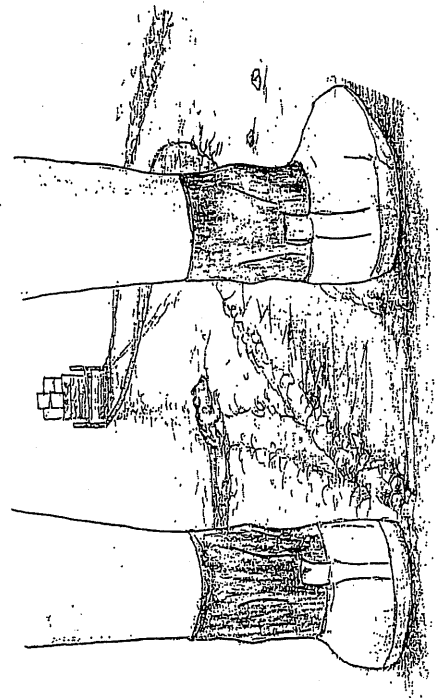
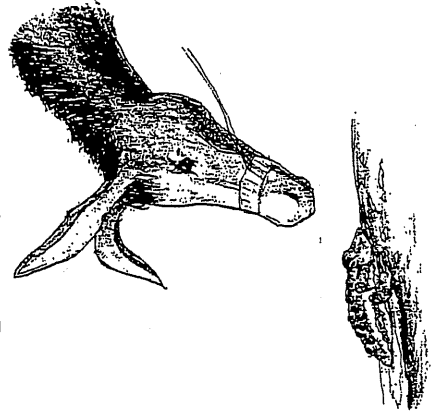
そしてついに、車輪はゆっくりと動きだし、新しいわだちをつけ

ていったのである。荷車は、ヒキガエルのいるくぼみの横を、ガタン、ゴトン、と大きな音をたてながら通り過ぎたのだった。

ヒキガエルは助かった。

それを見ていたアドルフの手から、石が足もとに静かにすべり落ちていった。ピエールたちも何も言わずに立っている。

やがて、荷車の音もロボのうれしそうないなきも遠くになっていった。子どもたちは、くぼみの中で小さく息をしているヒキガエルと、遠く去っていくロボのすがたを、いつまでもいつまでもながめていた。



(徳満 哲夫)

最後のおくり物

ロベータの夢は、有名な劇団「アルベル」の俳優になることだった。地方から一人でこの町に出てきたロベータには、養成所に通う余ゆはなく、自分なりの練習を重ねていた。ある日の夜、養成所がどのような練習をしているのかを知ろうと、窓越しに中をのぞいてみた。あまりの練習のきびしさと熱心さにおどろき、ロベータは、思わず立ちすくんでしまった。

それから、たびたび夜に窓の下で熱心にメモを取るロベータの姿が見られた。たまりかねて声をかけたのが、守衛のジョルジュじいさんだった。ジョルジュじいさんは、ロベータの話の聞き、

「本当なら許されませんが、他の守衛仲間にもわたしから話しておくよ。」と、言ってくれた。その日から、雨の日も風の日も、窓越しに練習のようすを熱心に見入るロベータの姿があった。

三か月ほどたった日の朝、ロベータは、アパートのドアの下に小さな紙の包みを見つけた。中には、養成所の月謝代に使ってください、という手紙とともに、

何枚かのお札が入っていた。自分にこんなことをしてくれる人を、ロベータは思いつかなかった。よく月も、その次の月もおくり物は届いた。

「お金をそのまま受け取ってよいものでしょうか。だれが送ってくれるのか探したんですが分からないんです。」

思いあまって、ロベータはジョルジュじいさんに相談してみた。

「きっとあなたに期待をかけている人なんだろうね。このお金は今借りていると思えばいいじゃないか。むだにしないようにがんばることだね。」

そう言った後で、

「あっ、そうそうわたしは今度、昼間の勤め²に変わるようになったのでね。しばらく余えなくなるけど、くじけちゃだめだよ。」

と、言って、やさしくほほえみかけた。

養成所に通い始めたロベータは、一生けん命に練習に取り組んだ。日に日に実力を身に付け、先生や仲間からもしだいに認められるようになってきた。ロベータは、いっそう練習に力が入った。

ところが、しばらくしてとつ然おくり物が届かなくなった。次の月も、その次

の月も やはりおくり物は届かなかった。
はらえない月謝がたまり始めた。

「せつかくこまできたのに……。」

ロベータは、思わずくちびるをかむのであった。



そんなある日の夜ふけに、とびらの外にかすかに人の気配がした。そとげん関の方をのぞくと、雪明かりの中にかがみこんで何かを置いている人かげが見えた。

「シヨルジュじいさん……。」

ゆっくりと起き上がったその顔が見えたとき、ロベータは息を飲んだまま、その場を動くことができなかった。シヨルジュじいさんは、立ち去ろうとしたが、そのようすがおかしい。と思つまもなく、雪の中にたおれこんだのである。

ロベータは外へ飛び出した。かけ寄ってみるとシヨルジュじいさんは苦しそうに息をしていた。ひどい熱。ロベータは、だきかかえて自分の部屋につれて行

き、ベットにねかせると、急いで近くの病院に向かった。げん関のわきには、見慣れた紙の包みがあった。

「難しい状態です。大分すい弱していますから。とにかく、だれか付きそいが必要です。」

医師がそう言ったとき、来ていた仲間の守衛たちが顔を曇らせた。

「体をこわして休んでいたのに、また無理して働き始めたからだろうね……。」

困ったなあ、このじいさんには身寄りがないんだ。」

と、だれかが言った。

付きそいとなれば、仕事を休まなければならない。ロベータは、しばらくうつむいていた。が、きっぱりと言った。

「ぼくが付きそいます。島子なんです。」

それからは、付きっきりで、ねむり続けるシヨルジュじいさんのかん病をした。しかし、体は日に日に弱っていった。

三日目の夜、シヨルジュじいさんは、かすかにほほえみながら、ロベータに小さな声で語りかけた。

「迷わくをかけることになって悪かったね。」

「そんな……。」

「息子だと言ってくれたんだね。」

「そんなことより、ぼくのためにこんなに苦しむことに……。」

「ちっとも苦しくはなかったよ……、幸せを感じたくらいだ。」

どこまでも気づかってくれるシヨルジュじいさんの言葉に、ロベールはかたをふるわせた。

「ぼく、おじいさんに謝らなければ。……お金が届かなくなったとき、ぼくはうらみました。本当におろかでした。どんなに苦しんでいたかも知らないで。許してください。……でも、どうして見ず知らずのぼくなんかに。」

「わたしも俳優になりたかった……。きみの姿を見ていて……。ありがとう、がんばるんだよ……。」

シヨルジュじいさんは、そう言うと、ロベールの手をとったまま、またねむりについた。それからしばらくして静かに息を引き取った。

その夜、ロベールはシヨルジュじいさんからの最後の手紙を取り出し、もう一

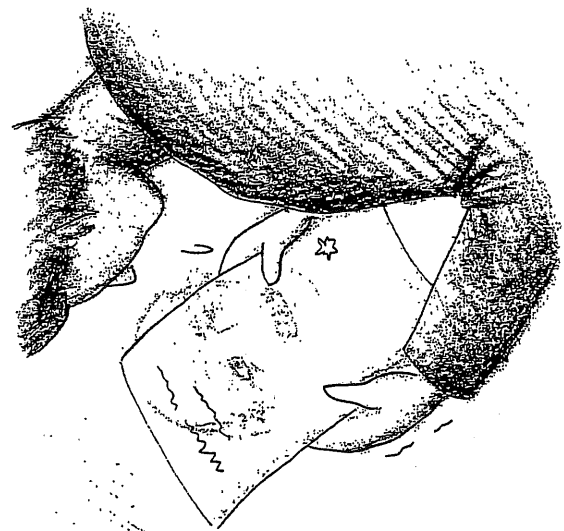
度読みはじめた。

おくれていたお金を入れておきます。もうすぐ、劇団の新人募集の試験がありますね。私は心よりあなたの努力が実ることを願っています。あなたの初舞台を一日も早く観られることを心待ちにしています。

手紙の文字がなみだでかすんだ。その中に、シヨルジュじいさんの語りかけるようなやさしい笑顔がつかんできた。

ロベールは、何かを決意したかのように、遠くに視線を移すのだった。

(武田 正樹)



裏庭でのできごと

チャイムが鳴り、給食時間が終わった。

食器を片付けると、校庭に向けて、みんな一斉に飛び出していった。

健二は、サッカーボールをボール箱の中から取った。

「健二、裏庭でやろうぜ。」

大輔と雄一が誘った。

「ええっ、裏庭はまずいよ。」

健二はそう答えてはみたものの、

「またこの前みたいに先輩にボールを取られてしまったらどうするんだよ。」

と大輔に言われては、返す言葉がなかった。

三人で、体育館の裏の『裏庭』に行くと、さすがにだれもいなかった。

突然、大輔が「あっ」と声を上げた。

「ほら、ほら、あそこ。」

大輔が指さすほうを見ると、一匹の猫が、物置の軒下にある鳥の巣に侵入しようとしていた。巣の中には、まだ生まれて間もないひなが見えた。

「ああっ、どうしよう」健二がそう思った瞬間、雄一がボールを猫めがけて投げていた。猫は、ボールに驚いて逃げた。しかし、次の瞬間、ガシャンという音がした。

雄一が投げたボールが物置の天窓に当たり、ガラスがはじけた。

「雄一、よく助けたな。」

「でも、どうしよう。」

「しかたないだろ。ひなを助けようとしてやったことなんだから。先生に報告しに行けばいいよ」

大輔は、ガラスを割ったことなど全然気にしていないようだった。

「じゃあ、先生に報告してくるよ。」

雄一は職員室へ行こうとした。

「雄一、そんな後でいいよ。俺たち、ひなの命を救うという、いいことしたんだぜ。少しぐらい遊んでもぼちには当たらないぜ。」

大輔は、ボールを蹴りながら、そう言った。

「いや、今行ってくるよ。」

雄一は、大輔を振り切って職員室へと向かった。

残された健二は、ガラスの片付けを始めようとした。

「健二、ちょっとだけやろうぜ。」

大輔は健二に向けてボールを蹴ってきた。

二人は初め、軽く蹴っていたが、距離をとって強く蹴り始めた。

そのうち健二が蹴ったボールが、さっきの物置のほうに飛んでいった。

「しまった」と思った時には、ガシャンという音がして、ガラスが割れてしまった。見ると、さっき割ってしまったガラスのとなりのガラスが、粉々に飛び散っていた。

「どうしよう…」健二は、そう思った。

そこに雄一が松尾先生を連れてきた。

「先生、ここです。」雄一は、物置の天窓を指した。

「ひなが猫にとられそうになったので、あわててボールを投げてしまったのです。」

雄一は、事情を説明し始めた。

「先生、雄一はひなを助けようとしてやったことなんです。おかげであのひなが助かったんです。許してやってください。」

大輔がすかさずそう言い添えて、雄一と松尾先生の間に割って入り、事情を説明した。

「どうも、すみませんでした。」

雄一は、深々と頭を下げた。

「よし、わかった。けがをしないようにしてガラスの破片を片付けておくように。終わったら、雄一は、職員室へ来るように。」

そう言い残して、松尾先生は職員室へ戻っていった。

「おい、どういうことなんだよ。ガラスが二枚割れているじゃないか。俺がさっき割ったガラスのとなりの、あのガラスは一体どうしたんだよ。」

雄一は、大輔に言った。

「俺じゃないぜ。おまえが職員室に行ってから一人で遊んでいたら健二がガラスを割ってしまったんだよ。」

大輔は、そう説明した。

「健二、おまえ、やっちゃったのかよ。」雄一は言った。

「ああ…」健二は、力なく答えた。

「なんだよ、汚ねえなあ。一人でやったことを俺の割ったガラスに便乗させて。おまえら、調子よすぎるぜ。」雄一は憤慨しているようだった。

「でも、俺がうまく言ってやったから、そんなにきつく怒られずに済んだんじゃないか。そんなに冷たいこと言わないよ。友達じゃないか。」

大輔は、そう言うつとダブルをしながら、校庭のほうへ行ってしまった。

残された二人の間には、気まずい雰囲気が漂い、無言のままだった。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

五時間目の授業は好きな英語だったが、健二は全然身が入らなかった。

授業が終わり、サッカー部の練習にいて、大輔に会った健二は

「ぼく、先生に言いにくいと思うんだ。」

と言った。

「いいよ、そんなこと。あの場で済んだことなんだから。」

「そんなこと言ったって…」

健二は後の言葉が続かなかった。

「いいか。俺を出し抜いて先生のところになんかいくなよ。おれの立場が悪くなるじゃないか。」

大輔は、ボールをもって、健二から離れて行ってしまった。

健二は、練習が終わっても、気が重かった。

次の日、健二は昨日のことが気になって、足取りの重いまま、学校へ向かった。

健二は、雄二に

「ぼく、やっぱり松尾先生のところに行ってくるよ。」と言った。

「おい、大輔は…」雄二は、大輔のことを気にしているようだ。

健二は首を横に振ると、一人で職員室へと向かった。

